

分明」とあるが、その守安家もいまは大畑にはなく、屋敷の面影もない。

この勝楽寺の裏に、二基の自然石と六地藏が並んでいる。弥陀三尊の梵字と「南無阿弥陀佛」と刻され、右側は慶長五年（1600）二月廿一日、左側は寛永六年（1629）三月の年号があり、俗名と法名が刻まれている。



大畑の石碑

一六、南葛城山の鏡ノ宿

雨乞いの峰と経塚

大畑の里からセメント道を葛城の尾根へ登る。分かれ道のところに大威徳明王おほいどくめいおうの祠ほらがある。尾根の峠は「桃の木タオ」といわれるところで、竹尾と北の滝畑たきへ越える峠である。尾根を東へ進むと和泉山脈の最高峰、南葛城山九二三のなだらかな峰が左手にある。熊笹が一面に生え、檜・杉の植林で、まことに静寂そのものである。頂上に「南葛城山」の道標が山好きな人によってたてられている。少し下ると、トタン葺きの小屋が道の北側になつている。白いポールに「妙法蓮華経みょうぼうれんげ安楽行品あんらくぎょうひん第十四経塚」とあり、黄色の標識に「南葛城山」とハイカーによってくくりつけられている。トタンで囲まれた内部に二基の自然石が安置され、これが鏡ノ宿の経塚なのである。前には花筒四基、般若心経の経筒などがおかれ、平成年間の聖護院・鬮青連阪奈

南葛城山の山頂



①身・口・意・誓願の行を安らかな境地で実践すること。

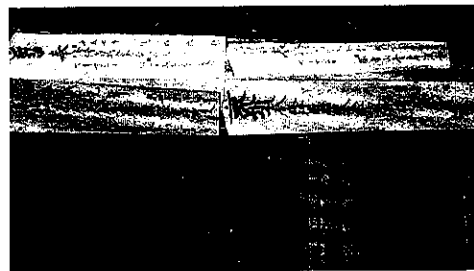
支部・犬鳴山・那智山の碑伝がおかれ、いまは第十四経塚の行所の一つになっている。

『紀伊統風土記』には、高野口町嵯峨谷に「鏡が宿」の項があり、^②「葛城山峯九重村に接す。伝へいふ楠公遠見して鏡を埋めたる地なり故に鏡ノ宿とも、楠遠見の壇ともいふ。此處に土中に穴の形ありて石にて覆ひたり、土人此處にて雲うら祭をなすに、此石を取除ければ雨降ると云ふより雨ふたともいへり、山伏の行所なり。此處より眺望するに風景も尤もよし。因りて近隣の村々より躑つづ躑つづの花さく頃などに酒肴を携へて登る者多し鼓腹の化を蒙る事想像すべし。鏡宿の少し西を八国ヶつふ（絶頂）といふ。紀泉和河湊撰播の八箇国を望む故に名つくるなり」とある。

このように南葛城山は「八国絶頂」の和泉山脈の最高峰で、「鏡ノ宿」といった修験の行所にふさわしい峰であって、また地元の雨乞いの峰である。

いま小屋掛けのなかに二基の大きな和泉砂岩の自然石がある。右側は「不動明王」とあり、裏面に善附をした村名がある。最も多い地元の五戸は九重村、二戸は嵯峨谷村、一戸は竹尾・田原・上中・下中の四村で、旧信太村民となっている。また左側の石には「善女龍王」と

鏡ノ宿の碑伝



②復刻版第二輯四四頁。



鏡ノ宿の第十四経塚

刻され、側面に「貳体施行発起人、九重村岡本総平治、嵯峨谷村山本小次郎、明治十六年癸未八月建之」とある。

そして小屋の左側の石に「二体施行発起人」とあって、明治一六年（一八八三）、九重と嵯峨谷両村の人によって同時に建立されたのである。

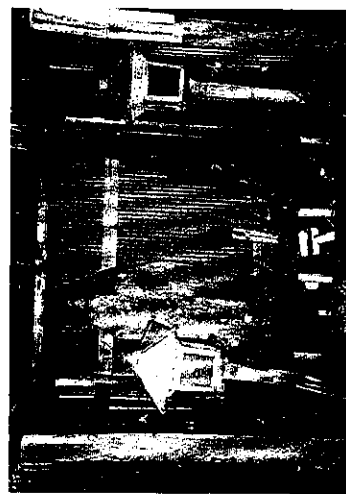
また小屋の左側の石碑に「南無妙法蓮華経」、側面に「昭和三十四年五月十八日建之、発起人下中、平田伊平・妙寺、桜井岩雄」とある。

これらの金石文からも「不動明王」「善女龍王」「法華経」といった修験の行所といえることができる。しかしここが葛城二十八品の安楽行品第十四経塚と断定できかねるものがある。それは『諸山縁起』や近世の『葛城峯中記』からも、行者は堀越や大畑から石川を下り光滝寺をへて、岩湧山の経塚への道順をとっており、この南葛城山の峰を東へ縦走する記録が未見であることによる。しかし修験の道も、時代によりいくつかの道が存在したかも知れず、いまは第十四経塚をこの鏡ノ宿か光滝寺かの二説があるにとどめることにする。

鏡ノ宿とは

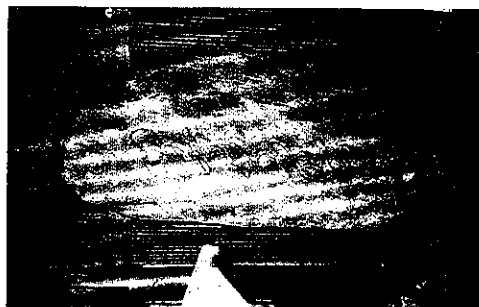
なおこの周囲には花崗岩の石碑がいくつかある。

一つは「一本杉・鏡ヶ宿、楠□□「壇舊跡」であるが、惜しくもこ



鏡ノ宿の石碑

「善女龍王」の碑



の下が欠落している。

二つは、「登臨遠望之、一名鏡宿者行場又爲村」「此地称楠木遠」
「處□方拳戰兵」「□公埋鏡宿」とある。

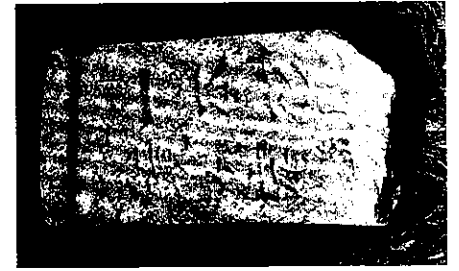
三つは、「民牧草地□」「国三保安舊蹟」「大正四年也□」とあり、
「信太村平田」による寄進が多い。

ここに一本杉があった。巨木で第二次世界大戦後も存在し、付近は
今と同じ熊笹が茂り、南に紀ノ川平野、そして高野の霊峰が真正面に
見える静かな山であった。しかし、この一本杉もいまは小屋の北側に
無造作に朽ちて横たわっている。

高野口町九重からは、途中まで車が入れるが、そこからは植林され
た杉林のよく踏みなれた道を登ると一本杉に出る。ここからは北への
光滝寺、東へは尾根つたいに高野豆腐の製造された森ノ谷や醬油谷を
左にみてゆくと、新しい道もついで岩湧山と三石山、さらに紀見峠へ
の三叉路になる。もとの付近には、金剛山が真正面にみえる太平茶
屋が戦時中まであったが今はない。



法華經の石碑



一本杉の石碑

二六 滝畑の光滝寺と槇尾山

光滝寺の経塚

蔵王峠から北へ石川の源流、蔵王谷を下ると福王山光滝寺がある。
天保一四年（六三）の同寺所蔵の『光滝寺覚書』には「福王山光滝寺
不動院」とあって、本尊は不動明王で葛城修験の行場で、欽明天皇の
時、行瀧が開基したと伝え、不動院寺家として延暦年間（六二一）
弘法大師が開いたと伝える西之坊・中之坊・堂所寺が記されている。
また元禄五年（六九）には、修験道本山派の聖護院の院家、若王寺
の末寺であった。しかし明治の修験道廃止令で天台宗、さらに融通念
仏宗に改宗している。そして西国三十三所霊場、槇尾山施福寺の奥院
ともいわれる。

『諸山縁起』、『葛城峯宿次第』にも「光滝寺」とあり、「四十九瀧、
四十九窟」と、石川の源流の光ノ滝をはじめ多くの瀑布があり、修験

①『河内長野市史』史料篇近世三〇
一四頁。

光滝寺の本堂

